松木兄を偲ぶ喰べあるき

荒木　義栄

松木兄は奥の随身として誠に御小僧さん風であったが、僕は身延に在山中は最初は会計寮、次は二階寮へ、次は会所、最後は新寮と旅がらすの様に渉って歩いて若干あばづれの点もあったから本山の役課からにらまれた事は言う迄もない。今更ら乍ら更生保護の問題や社会教化の問題にとりくんで青少年対策に兎や角と物申す義理合もないと懺悔している。

先般も箱根の宿で青少年を招いて討議した。その助言者の一人として出席終了して帰宅したら、机上に学校からの封書一通、何事ならんと開いてみると松木兄を偲んでの記事を棲神にのせて追悼号を出す由であるが、教学方面の件は他の諸聖にゆづり専ら僕は二人での喰べ歩記を筆にする事にする。

大正二年四月早々改組された祖山学院の第三年生に編入されて松木兄と机を並べた。仏書を習う事が初めての自分には何も判らなかった。それを静かに教えてくれたのが松木兄や、北海道出身の三和連城君であった。

尤も当時の法主様は小泉老師で、お小僧さん風の松木兄は随身として克く似合ったが、三和、小林君等は二王様の様で一寸似合はなかった。

最初に町の方へ散歩に連れられて案内してくれたのが和田屋であった。丁度留守宅であったが平気で裏木戸を開け

て入り込み、之から御馳走を作るから荒木君仏坦へ灯火をつけて御経を読めとの事、其内誰れか来たなと思ったら伊藤大先輩に、お伴として小林君であった。のしこみが出来る内、先づ御茶をと濱物樽から濱物をとりだして呑み始めたが、留守の宅へ上り込んで勝手な事をする者と不思議に思ひ乍ら喰べ終っても誰れも家族の人々は帰らなかったが其儘和田屋を後に山へ上った。

大正三年の正月昔のあの薄暗い台所の食堂で正月の雑煮餅を喰べたが、室へ持って帰ると五枚渡され、食堂で喰べると何枚でも喰べ放題で自分は好きな餅の事なれば松木君と並んで喰べてたが数が多くなるにつれて何枚位喰べるかと、それでは溝田君と喰べくらべをとて、荒木何枚、溝田何枚と数えてくれたのが松木兄だ。僕が拾三枚喰べた時溝田君が拾壱枚で音をあげて仕舞った。其年の暮れに僕は入営する為めに札幌へ引上げた。留守中溝田君は独りで拾六七枚喰べた事を三年後に除隊し帰山して聞いた。其翌年決戦となり松木君が再度の行司役で、喰べも喰べたり溝田君が拾八九枚の時もう駄目だと著をなげた時僕は二十三枚であった。今日此頃の様な小さい切餅の様でなく、はがきの半分位の大きさだから今更ら乍らあきれて仕舞うでしょう。

大正九年二月養父が遷化して学年末を控へ乍ら帰国した。家族の後始末して四月早々に帰山して追試験を受けた。関本教頭や亀口教授は一旦試験問題を提出して後は松木君を残してお室へ帰られたが監督が松木君。克く出来たし問題の解説に種々なる指示をしてくれて追試験は無事通過して最上級に進んだが喰べ歩記を離れて此追試験の結果は大感謝をしている。

むかし灯耀会と申す弁論会があって、幻灯にて御一代記を伊藤海聞師の指導を受けて弁論を上達さして貰った。それを実地に附すべく、大正九年の夏に藤田光蓁君や、川口智随君等と織物の産地相生市へ道路布教に出かけた。松木

君も同道したかったらしいが何かの都合で取止めとなったが、大正十年僕が卒業して札幌へ帰るのを利用して将来北海道方面の布教を夢見もしたが、其年の暮れ師匠の命で修法布教の両輪を考へさせられて入行した二月十日の出行の日のエピソードもあるが略して置く。

松木、藤田の両君は役課の小松諦照師に話し込んで三人の北海道布教を力説して、三人の身延山布教師の辞令を出して貰う事を交渉した。幸い許され主要寺院へ日程等の連絡は札幌で僕が指令して、約一ヶ月に陟りて若い身延山布教師に修法布教等致れりつくせりの布教終了後、最后の十勝国帯広の法華寺で三日間力説したら、総代から申出あり身延の様な山では到底喰べられない新らしい鮭の刺身を作りました。お若いからとて拾人前です、それを一切れも残らず喰べたが総代も後日驚いてた由。

昭和に入って僕の後住の坂本玄寿君が入行のため上京した時に、丁度松木君も上京してたので、夕食を御馳走するとて両国の坊主しゃもという鳥屋へ連れて行ったが、松木、坂本の両君は当時酒呑童子で、二人の裏に徳利が三十二本、喰べた鳥が盤台三枚（一枚に八人前盛ってあった）だから廿四人前であったから女中が驚くこと、皆さんは余りにも人並はづれてると笑はれたが、三人は平気でそれ〴〵帰るべき所へ帰った。

未だ〳〵喰べ歩る記の内容は数々あるが四百字五枚以内との限定版の故に此辺で松木君の位隣大覚と合掌して筆を止む。南無妙法蓮華経

（東京・円珠院住職）